



TITLE:

# シュンペーター思想形成における マーシャルの重要性について

AUTHOR(S):

根井, 雅弘

---

CITATION:

根井, 雅弘. シュンペーター思想形成におけるマーシャルの重要性について. 経済論叢 1986, 138(1-2): 82-99

ISSUE DATE:

1986-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/134155>

RIGHT:

# 經濟論叢

第138卷 第1・2号

---

数量モデル分析と統計学・蜷川理論(1)……	野澤正徳	1
英仏通商条約とフランス羊毛工業……………	清水克洋	21
危機における労働過程の変容……………	花田昌宣	44
期待と慣習：ケインズの貨幣観によせて……………	二階堂達郎	64
シュンペーター思想形成における マーシャルの重要性について……………	根井雅弘	82

経済学会記事

---

昭和61年7・8月

京都大學經濟學會

## シュンペーター思想形成における マーシャルの重要性について

根 井 雅 弘

### I は じ め に

シュンペーターを論ずる場合、我が国においてはワルラスとマルクスを重視する立場が影響力をもってきた。この解釈は必ずしも誤っていない。しかし、シュンペーター体系を把握するにあたって、欠けている側面があると私は考える。それがすなわちマーシャルとの関連である。本論文は特にこの点について光を与えることを目的としている。我々はシュンペーターの思想の発展をたどりながら、彼にとってマーシャルがどういう存在であったかをみていくことにしよう。

### II ワルラス賛美者として

シュンペーターがワルラスの崇拜者として経済学者のスタートをきったことはよく知られている。『理論経済学の本質と主要内容』（1908年）に先立つ1906年（23歳）に、彼は「理論経済学の数学的方法について」と題する論文を発表する。その中で彼は「数量的学問において厳密性と広範な演繹の可能性」<sup>1)</sup>が存在すること、そしてそのための方法が物理学の模範にならって本質的に数学であることを指摘している。さらに二年後、『本質』を書き上げた彼は、これを尊敬の念をもってワルラスに謹呈した。1908年10月9日付のワルラスにあてた手紙の中でシュンペーターは言う。「私は先生にお会いしたことはありません

1) J. A. Schumpeter, Über die mathematischen Methode der theoretischen Ökonomie, in J. A. Schumpeter, Aufsätze zur Ökonomischen Theorie, 1952, S. 535.

んが、これは弟子の本でございます。……科学的経済学に向けての新しい時代が、先生のすばらしい論文によって開かれました。……私は先生の弟子として認められ、また先生によって先鞭をつけられた業績に何かを貢献することを心から願うものであります」<sup>2)</sup>。

『本質』の中心問題は静学的均衡理論である。静学理論とは無時間の理論である。それは「均衡の諸条件と均衡がどんな小さな攪乱の後でも回復する傾向にある道筋についての単なる言明にすぎない。」<sup>3)</sup> 実際、『本質』の大部分はワルラス理論の解説といってもよいほどにワルラス的である。

だが、シュンペーターは単なるワルラス解説者にとどまることで満足しなかった。彼は静学を乗り越えようとする。発展理論の建設——これが彼の次の目標となった。すでに『本質』の序文において、彼はこう明言する。

「“動学”はいかなる意味においても、方法的にも内容的にも、静学とは全く異なったものである。」<sup>4)</sup>

シュンペーターの思想形成を考えるにあたって、私は彼が静学から動学へと移行する過程を重視しなければならないと考える。そしてシュンペーターが自らの発展理論を完成するにあたって、もっとも意識せざるをえなかった存在こそマーシャルであったのである。

それでは、マーシャル自身は経済動学についてどのような考え方をもっていたのであろうか。我々は次にこれをみていくことにしたい。

### III マーシャルを超えて

マーシャルはすでに『経済学原理』の第5版(1907年)への序文において、

- 
- 2) William Jaffé ed., *Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, Vol. III, 1965, p. 378.
  - 3) J. A. Schumpeter, Preface to Japanese Edition of *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, in R. V. Clemence (ed), *Essays of J. A. Schumpeter*, 1951, p. 159.
  - 4) J. A. Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie* (以下 *Wesen* と略称), 1908, Vorwort, xix, 大野忠男・木村健康・安井琢磨訳「理論経済学の本質と主要内容」(上), 1983年, 序文, 26ページ。

経済学の対象が不連続で頻度も小さくかつ観察困難なものよりもむしろ、非常に頻繁にかつ規則正しく起こるので詳細に観察し綿密に研究できるような現象であることを述べていた<sup>5)</sup>。この考え方はさらに敷衍されて第8版(1920年)への序文に叙述される<sup>6)</sup>。

マーシャルは『産業と商業』(1919年)において「経済状態は大体のところ緩慢で漸進的な発展の結果である。幾分かその理由故に経済状態は多のうちに一を、一のうちに多を示している。未来をよりよく見通すためには過去を少し顧みることが必要である。」<sup>7)</sup>と簡潔に述べているように、「一切を連続と連関の相の下にみとる」<sup>8)</sup>ことがマーシャルのヴィジョンであった。マーシャル曰く、

「われわれの主要な関心は、よきにせよあしきにせよ、変化し進歩しないではいられない人間にある。断片的な静学的仮説は、動学的——いなむしろ生物学的——思考にたいする一時的な補助手段としては有用であるが、この経済原論に関する巻においての中核的な観念は、他のすべての巻においてと同じく、生きている諸力と運動の観念でなくてはならない。」<sup>9)</sup>

シュンペーターは、マーシャルのこのような生物学的類似に対して矛先を向ける。『本質』において彼はこう言う。

「すなわち、経済現象をそれ自体として、その内奥の本質に立ち入ることなく取り扱うことが、そういった本質に立ち入るよりも多くのものを与える限り、経済学は他に依存するものではなく、自己充足的であるという事実がそれである。しかしその場合には、生物学的議論は、われわれの問題に対して殆どまったく意味を持つことを得ず、双方の領域は互いにあまり関係がない、——

5) A. Marshall, *Principles of Economics* (以下 *Principles* と略称), ninth (variorum) edition with notations by C. W. Guillebaud, Vol. II, 1961, pp. 46-47, 馬場啓之助訳「経済学原理」I, 昭和40年, 232ページ。同じような考え方は, A. Marshall, *Industry and Trade*, 1919, pp. 5-6. にも見られる。

6) A. Marshall, *Principles*, Vol. I, 1961, pp. xii-xiii, 邦訳, I, xv-xvi ページ。

7) A. Marshall, *Industry and Trade*, p. 5.

8) 菱山泉「近代経済学の歴史」昭和40年, 9ページ。

9) A. Marshall, *Principles*, Vol. II, p. 50, 邦訳, I, 235ページ。

少なくとも現在および最も近い将来において。……この思考方法は、その現実の功績について吟味するならば、空虚であることが判明し、私の考えでは今日、あらゆる真面目な探究の結果は幻滅たらざるをえない。』<sup>10)</sup>

シュンペーターの発展理論は『経済発展の理論』（初版1912年、第2版1926年）に結実するが、彼はここでマーシャルの説く連続的で漸進的な進歩というヴィジョンをきっぱり拒否した。彼にとって動態とは循環運動とは違って、循環を実現する軌道の変更であり、またある均衡状態に向かう運動過程とは違って、均衡状態の推移である。ただし、このような変更あるいは推移のすべてが動態を意味するのではなく、第一に経済から自発的に生れた変化、第二に非連続的な変化でなければならなかった<sup>11)</sup>。

シュンペーターがいかにかマーシャルを意識していたか。このことを指摘しておくのは非常に大切であると私は考える。批判をしたということは、必ずしも評価しなかったということの意味しない。エーリッヒ・シュナイダーが次のような証言をしている。

「私がはじめてシュンペーターに会ったとき、彼は私がフランス語を読むかどうかを尋ねた。どうしてそれを知りたいのかを私が問うと、彼はこう言った。『あなたはワルラスを原文で読まなければなりません。ワルラスはすべての経済学者にとっての必須条件 (eine conditio sine qua non) です。』そして、さらに彼は私が英語を読むかどうかを尋ねた。どうしてそれも知りたいのかを私が問うと、次のような答が返ってきた。『マーシャルの「原理」はすべての経済学者にとっての必読書 (ein "must") です。』」<sup>12)</sup>

シュンペーターはマーシャルが経済学が発展に関する科学であること、及び人間性が順応的且つ可変的なものであり変化する環境の函数であることを悟っ

10) J. A. Schumpeter, *Wesen*, SS. 538-539, 邦訳, (下), 367-368ページ。

11) J. A. Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung* (以下 *Entwicklung* と略称), 2 Aufl., 1926, SS. 98-99, 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳, 「経済発展の理論」(上), 1977年, 178-179ページ。

12) Erich Schneider, Joseph A. Schumpeter: *Leben und Werk eines großen Sozialökonomens*, 1970, S. 12, Note 9.

たところの最初の経済学者の一人であることを高く評価する<sup>13)</sup>。しかし、両者は動学の方法において別の道を歩むのである。シュンペーター曰く、

「彼（マーシャルを指す——引用者）の思考は発展の変化という言葉づかい——有機化学の用語では非可逆的な過程という言葉づかい——で述べられた。何かそういう香りのするものを彼は定理や概念に与え、さらに進んでそれら定理や概念の基になる事実観察にもそのような要素を与えた。私はそれらの背後にある発展の理論が満足なものであったとは考えない。市場の自動的拡大——人口の増加や貯蓄によってのみ動機づけられる拡大——それらの拡大が内部経済及び外部経済を導き、さらにそれが一層の拡大を説明するような拡大、そういうものを超えない表式は発展の理論たりえない。」<sup>14)</sup>

さて、ではいよいよ次節において、シュンペーターの発展理論を検討していくことにしよう。

#### IV シュンペーターの発展理論

シュンペーター発展理論の出発点は静止的経済である。静止的経済過程とは、「自らの起動力によって実際に変化する過程ではなく、単に時間をともなって流れる実質所得の定常率を再生産するにすぎない。」<sup>15)</sup> 静止的経済は静学的経済とは異なることに注意しなければならない。静学とは無時間の理論であった。これに対して静止的過程とは発展なき経済が永久に変化することのない軌道を進むという「概念的な描写」<sup>16)</sup>のことである。このような方法はフジオクラートによって試みられ、決定的にはワルラスによって達成された、と述べたあとで彼はさらにこう付言する。

「マーシャルの構造も同じ概念にもとづいている。このことは、マーシャル

13) J. A. Schumpeter, *Ten Great Economists from Marx to Keynes*, 1951, p. 93, 中山伊知郎・東畑精一監修『十大経済学者』昭和27年, 135ページ。

14) *ibid.*, p. 101, 邦訳, 146ページ。

15) J. A. Schumpeter, Preface to Japanese Edition of *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, in R. V. Clemence (ed), *Essays of J. A. Schumpeter*, 1951, p. 159.

16) François Perroux, *La pensée économique de Joseph Schumpeter*, 1965, p. 62.

その人がそれを好まず、彼の説明の表面からほとんど消してしまった事実を考えると、ここに強調しておくことが必要である。<sup>17)</sup>

シュンペーター発展理論の核心となる考え方は、企業者による非連続的な新結合の遂行が経済発展をもたらすということである。そしてこの新結合は均衡の近傍において生ずるとされている。なぜなら、均衡の近傍では利潤の欠如が革新への誘因を与え、また相対価格・絶対価格の安定によって新しいプロジェクトを完全に計算することができるからである<sup>18)</sup>。均衡の近傍では生産要素は完全利用されていると考えられるから、新結合の遂行のために必要な生産手段はなんらかの旧結合から奪いとってこななければならない。そしてその新結合のために必要な生産手段の転用を金融するのが銀行による信用創造であると考えられている点がシュンペーターの特徴である<sup>19)</sup>。

シュンペーターはなぜ銀行家に重大な役割を負わせるのであろうか。それは新結合に必要な生産手段の購入に用いられる金額が伝統的な答えでは「国民経済の貯蓄の年々の増加およびその年々解放される部分」からであるとされていたためであった。伝統的な答え、これはすなわちマーシャル学派の答えを意味するであろう。シュンペーターは自己の理論を際立たせるためにこの貯蓄額を無視するという極端な方法をとった。

「われわれはこのような貯蓄額から出発することは許されない。なぜなら、その額はすでに進行している発展の私経済的結果からのみ説明されるものだからである。」<sup>20)</sup>

シュンペーターの企業者が資本に伴う危険を負担する存在でないとすれば、マーシャルはどのように企業家をとらえていたのだろうか。マーシャルによれば、

17) J. A. Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. I, 1939, p. 36.

18) G. Tichy, "Schumpeter's Business Cycle Theory", in C. Seidl (ed), *Lectures on Schumpeterian Economics*, 1984, p. 78.

19) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, S. 109, 邦訳, (上), 195-196ページ。

20) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, SS. 107-108, 邦訳, (上), 193-194ページ。



「かれらは事業の危険を『敢行し』ないしは『引き受ける』。かれらは仕事に必要な資本と労働力を結合させ、その一般的な計画をととのえないし『製作し』その細かい細部にたいしては監督を加える。実業家はある意味では高度な技能をもった職階に属するものともみられるし、他の意味では肉体労働者と消費者とのあいだに介在する仲介人だともいえよう。」<sup>21)</sup>

すなわち、シュンペーターはここでもマーシャルと意識的に別の道を選んだのである。彼にとって銀行家が唯一の資本家である。銀行家は「新結合を遂行しようとするものと生産手段の所有者との間に立っている。社会的経済過程が強権的命令によって導かれていない場合にのみいえることであるが、彼は本質的に発展の一つの現象である。彼は新結合の遂行を可能にし、いわば国民経済の名において新結合を遂行する全権限を与えるのである。彼は交換経済の監督者である。」<sup>22)</sup>したがって企業者と資本家を混同することは許されない。

「われわれがこの定義（マーシャル学派の企業者の定義を指す——引用者）を承認できない理由は次の点にある。すなわち、われわれの問題とするところはまさに、企業者活動の特徴を他の活動から区別し、これを特殊な現象たらしめる本質的な点にあるのに対して、彼の場合にはこの点が多く of 日常的事務管理の中に埋没しているからである。」<sup>23)</sup>

われわれはここに両者の基本的な立場の差異を認めることができる。すなわち、マーシャルの定義が経験的事実に根ざしているのに対して、シュンペーターのそれは理念的性格をもつということである。この相違は、マーシャルが部分均衡理論を説き、シュンペーターが一般均衡理論に心酔した事実とも関連していると思われる。マーシャルが精力的に実態調査を行ったことはよく知られている<sup>24)</sup>。これに対してシュンペーターの狙いは「それだけ孤立してはほとんどまったく現実にもみられないような単一の要因を理論的に抽出加工す

21) A. Marshall, *Principles*, Vol. I, p. 293, 邦訳, II, 283-284ページ。

22) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, S. 110, 邦訳, (上), 197-198ページ。

23) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, S. 115, 邦訳, (上), 205-206ページ。

24) 井手ロー夫「マーシャル」昭和63年, 32-34ページ。

る」<sup>25)</sup>ことにあったのであった。

さて、新結合による生産手段の転用は通常消費財産から投資財産へと資源を移転することによってなされる。したがって、投資財の生産は消費財の生産を減らすことによってのみ増加させることができる。相対価格が変化し絶対価格の増加も避けられない。シュンペーターによれば、新結合は群生して現れる。なぜなら、いったん新結合の遂行を妨げる障害や困難が先頭をきった企業者によって克服されれば、あとに続く模倣者はより容易に新結合を遂行することができるようになるからである。このように新結合によって生ずる第一次的波状はさらに第二次的波状を伴うことになる。量的にはこの第二次的波状の結果の方がより重要である。新結合の群生は、いずれ新しい設備によって生産された財を市場にもたらずであらう。供給は増加し、したがって諸価格は下落する。企業者は銀行によって創造された信用を少なくとも一部をかれらの利潤から返済する<sup>26)</sup>。

好況は次のような理由で終局を迎える。まず、新結合の群生によって生ずる攪乱によって経済は調整過程を余儀なくされる<sup>27)</sup>。つまり、デフレーションの開始である。第二に、先行きを悲観した銀行家が信用創造を縮小させること。第三に、ショックが発生する見込みが高くなることによって不確実性が増大すること<sup>28)</sup>。不確実性の存在は新結合の計算を不可能にし、企業者による新結合の遂行が減少する。

このようにして好況は景気後退へ突入するのだが、第二次的波状は *speculative punting* によってさらに強められることがあり<sup>29)</sup>、その場合には容易にワルラス的均衡を通り越して経済を不況へと落とし入れる。シュンペーターにと

25) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, S. 115, 邦訳, (上), 206ページ。

26) G. Tichy, *op. cit.*, p. 78. 以下これに依存した。

27) J. A. Schumpeter, "The Instability of Capitalism", *Economic Journal*, Vol. 38, Sept. 1928, p. 382.

28) G. Tichy, *op. cit.*, p. 79.

29) J. A. Schumpeter, "The Explanation of the Business Cycle", *Economica*, Vol. 7, Dec. 1927, p. 307.

って、景気後退は経済の正常な調整過程であるが、不況はそうではない。そして不況が起こるかどうかは事実の問題であり、偶然的な環境に依存するのだから、不況の発生や過程についてのいかなる理論的期待もなしえない<sup>30)</sup>。

不況はやがて終わりをづけ、経済は回復へと向かう。すなわち、「比較的均衡していて、再び新結合の遂行にとって出発点となりうる程度の無発展状態への接近」<sup>31)</sup>がはじまるのである。このような均衡への傾向は次のような原因をもつと考えられる。Tichy によれば、不況の過程で企業の中には破産を余儀なくされるものもあるが、そのうち生き残った企業はマーケット・シェアを増大させること。相対価格のシフトは損失のみでなく利得のチャンスをも与えること。また政策行動やなんらかの都合のよい偶然事などもその一つである<sup>32)</sup>。だが、シュンペーターが強調するのは、理論的には体系は其中でそれ自身によって回復するところの breathing space をけっして獲得できないということである<sup>33)</sup>。

さて、このように循環の最後の局面たる回復は均衡へと接近していく。景気後退のときにみられた均衡を通り越してしまう心配はここでは少ないとシュンペーターは見ている<sup>34)</sup>。

「均衡が回復されると、経済は不定の期間、波状を伴うことなくそこにとどまる。しかし、遅かれ早かれ、新結合の見込みがすでにのべた理由で増大する。けれども、いつ新結合が発生するかは indeterminate である。なぜなら新結合が deterministic な性格とともに stochastic な性格をもつからである。」<sup>35)</sup>

シュンペーターは以上のように循環と発展とが絡み合いながら運動するという発展理論を提示した。基本的には『発展』の初版(1912年)においてその理論は体系化されているといえるが、以上の説明は議論を明確にするため『景気

30) J. A. Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. I, p. 150.

31) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, S. 357, 邦訳, (下), 246ページ。

32) G. Tichy, *op. cit.*, p. 80.

33) J. A. Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. I, p. 154.

34) *ibid.*, p. 156.

35) G. Tichy, *op. cit.*, p. 80.

循環論』(1939年)の四局面循環に基づいている。(『発展』においては、好況—景気後退という二局面循環がとられている。『景気循環論』では、二局面循環を第一次接近段階、四局面循環を第二次接近段階として説明されている。)<sup>36)</sup>

シュンペーターはさらに第三次接近段階として三循環同時存在の仮説をたてる。三循環とは、コンドラチェフ波(平均同期50—55年)、ジュグラール波(平均同期8—10年)、キッチン波(平均期40ヶ月)の三循環のことである<sup>36)</sup>。

シュンペーター理論の特徴は、この三循環の起動因をすべて技術革新(新結合)に帰していることである。この *monocausality* 仮説に批判が集中するのは理解できないことではない。コンドラチェフ波が技術革新より生ずるというのは納得できるとしても、ジュグラール波は設備投資に、キッチン波は在庫投資に起因すると一般には考えられている。けれども Tichy の指摘するように、「このような説明はシュンペーター的説明というよりもケインジアン的な説明であろう」<sup>37)</sup>と思われる。経済体系に加えられた衝撃に対してそれがどう反応するかを精緻化した理論と企業者による新結合の遂行が発展と循環とを絡み合わせながら経済を進行させるというシュンペーター理論とは、本質的に異なる地盤に立つものであると言わねばならない。

我々はこれ以上シュンペーター理論に対する批判を検討する余裕はない<sup>38)</sup>。しかし、ここでは次のことを指摘しておこう。すなわち、シュンペーターの狙いはワルラス的な均衡理論を土台として企業者による新結合の遂行が経済を循環と発展とを不可分に結びつけながら運行させるダイナミックな過程を分析することにあった。このことで彼はワルラスとマーシャルを乗り越えたと考えたということである。「ワルラス的な、あるいはマーシャル的な方法のどちらか

36) 伊達邦春「シュンペーター」昭和54年、105-109ページ参照。

37) G. Tichy, *op. cit.*, p. 81.

38) シュンペーター景気理論についての好意的なコメントについては次の論文集のA・ハンセン論文を参照。Seymour E. Harris (ed.), *Schumpeter: Social Scientist*, 1951, pp. 72-82, 中山伊知郎・東畑精一監訳、坂本二郎訳「社会科学者シュンペーター」昭和30年、223-231ページ。反対に批判的なコメントは次の論文参照。S. Kuznetz, "Schumpeter's Business Cycle", *American Economic Review*, Vol. 30, pp. 257-271.

によって可能な説明よりも満足に」<sup>39)</sup>景気循環を説明できるとシュンペーターが信じたこと、これである。

さて、シュンペーターの発展理論は技術革新（新結合）を中核とするものであった。彼の場合、その対象はキッチン波からコンドラチェフ波までを包んでいる。彼は意識的にマーシャル流の時間区分を避けたのだと私は考えている。私はシュンペーターの経済発展の理論は中期理論であると考えたい。なぜなら彼は単に体制内における経済の発展過程を分析しただけでなく、コンドラチェフ波をいくつも経過したような、シュンペーターの言葉を使えば、「一世紀といえども短期である」<sup>40)</sup>ような長期的展望のもとに体制自身がどう変化していくかを進んで論究していった人であったからである。したがって私は中期理論をこのような真の長期理論と区別して考えることにしたい。フランス・ソシオロジスムのアンドレ・マルシャルの言葉を借りれば、中期理論は「体制のうちの動態、すなわち短期動態」、長期理論は「体制の動態、すなわち長期動態」にあたるといえるだろう<sup>41)</sup>。

ワルラスとマーシャルを超えたと信じたシュンペーターは今度は長期理論を樹立するにあたってまた一人意識せざるをえない存在にぶつかった。カール・マルクスである。長期理論はすぐれて社会学的・歴史学的性格を帯びることになるが、我々はこれを検討する前に、企業者についてのシュンペーターとマーシャルの考え方の比較を試みたいと思う。

## V 理想的企業者とは

マーシャルは、理想的な企業者はいくつかの異なった職能をあわせもたなけ

39) J. A. Schumpeter, Preface to Japanese Edition of *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, in R. V. Clemence (ed), *Essays of J. A. Schumpeter*, 1951, p. 160.

40) J. A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy* (以下 *Capitalism* と略称), third edition, 1950, p. 163, 中山伊知郎・東畑精一訳「資本主義・社会主義・民主主義」(上), 昭和37年, 298ページ。

41) 久保田明光「現代フランス経済学」昭和32年, 第6章「アンドレ・マルシャルの動態理論」を参照。

ればならないと考えた。労働の監督ということは、事業の経営の一つの側面、それも往々にして重要とはいえない側面にすぎない。企業者はその事業の危険のすべてを引き受けるが、彼は社会のために二つの別個のサービスをするのであり、二様の能力をもたなければならない<sup>42)</sup>。

第一に、特定の注文に応じてではなく、一般的な市場をめあてに財を製造する製造業者は、その営業に関する事物の徹底した知識をもたなくてはならないこと。かれは慎重に判断し大胆に危険をおかすことが肝要である。これは商人および生産の組織者としての役割である<sup>43)</sup>。

第二に、使用者としての役割において、彼は天性の人間の指導者でなければならないこと。彼はまずその補助者を選び、選んだ以上かれらを全面的に信頼すること。かれらに事業に関心をもたせ、かれらの信頼を勝ち取り、かれらから機略と創造力をすべて引き出すこと。反面かれは万事に全般的な統制力を及ぼし、事業の主要な計画に関して秩序と統一を維持しなければならない<sup>44)</sup>。

これに対してシュンペーターは次のように考えた。まず第一に、企業者は「洞察」をもたなければならない。それは事態がまだはっきり確立されていない瞬間においてすら、その後明らかになるような仕方事態を見通す能力であり、人々が行動の基準となる根本原則についてなんの成算ももてない場合においてすら、またそのような場合においてこそ、本質的なものを確実に把握、非本質的なものをまったく除外するような仕方で見通す能力である<sup>45)</sup>。第二に、彼は意志の新しい違った使いかたが必要である<sup>46)</sup>。第三に、かれは一般にあるいはとくに経済面で新しいことをおこなおうとする人々に対して向けられる社会環境の抵抗を克服しなければならない<sup>47)</sup>。

シュンペーターにおいては、新しい可能性に対してのみ特殊な指導者類型が出現するとされている。そして指導者自身は新しい可能性を「発見」したり「創造」したりしない。新しい可能性はいつでも存在しているのだが、指導者

42)43)44) A. Marshall, *Principles*, Vol. I, pp. 297-298, 邦訳, II, 289-290ページ。

45)46)47) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, SS. 125-127, 邦訳, (上), 224-227ページ。

機能とはこれらのものを生きもの、実在的なものにし、これを遂行することである<sup>48)</sup>。指導者類型を特徴づけるものは、まず事物を見る特殊な方法であり——この場合知力というよりもむしろ確固たる事物をつかみ、その真相を見る意志と力を意味する——またひとりで衆に先んじて進み、不確定なことや抵抗のあることを反対理由と感ぜない能力であり、さらに、「権威」、「圧力」、「人を服従させる力」といった言葉であらわすことのできる他人への影響力である<sup>49)</sup>。

マーシャルは理想的企業者の条件の第二点として「天性の人間の指導者」、つまりリーダーシップをあげている。組織におけるリーダーシップを指摘したことはすぐれてマーシャル的な特徴であると私は考える。なぜなら彼は生産要因として土地・労働・資本のほかに組織をとりあげた人であったからである。マーシャルは企業者利潤が企業者の個人的業績に解消されるとは考えない<sup>50)</sup>。彼は企業者利潤を準地代という概念によって説明する。

「使用者の視角は事業体の全利益を包含しているわけではない。かれの従業員に帰属すべき部分がべつにあるからである。じじつ、ある場合にはまたある目的のためには、ある事業体のほとんどすべての所得は準地代とみなすこともできよう。つまりその仕事に従事していろいろな施設や人間を用意するために使った費用とはほとんど関係なく、その商品にたいする市場の状態によって当面決定されるところの所得とみなされるわけである。べつのことばを使うと、その事業体にたずさわるいろいろな人々のあいだに、慣習ならびに公正の觀念に考慮をはらいながら、交渉によって分配していくことのできるところの、複合的な準地代だといえよう。」<sup>51)</sup>

今やシュンペーターとのコントラストは明らかであろう。シュンペーターにとっては先頭をきった企業者による新結合の遂行によって利潤が生ずる。それはその企業者の個人的成功によるのであって、組織の力によるのではない。シ

48) 49) *ibid.*, SS. 128-129, 邦訳, (上), 229-230ページ。

50) 池本正純「企業者とは何か」昭和59年, 125-126ページ。

51) A. Marshall, *Principles*, Vol. I, p. 626, 邦訳, IV, 163-164ページ。

シュンペーターの企業者を動機づけるものは、第一に、私的帝国を建設しようとする夢想と意志であり<sup>52)</sup>、次に、勝利者意志であり<sup>53)</sup>、最後に創造の喜びである<sup>54)</sup>。池本正純氏がいみじくも指摘したように、シュンペーターの見方が理念的であるのに対して、マーシャルは理念に先走らずつねに経験をふまえて復眼的なものになっているのである<sup>55)</sup>。

以上にみてきたように、両者の考え方は企業者についてもきわだった対称をなしている。理念に走ったシュンペーターの見方が我々に強烈な印象を与えるため、ややもするとマーシャルを過小評価しがちになると私には思われる<sup>56)</sup>。マーシャルの見方を折中説として片付けることは彼に対して公平を欠くと言わねばならない。現実のリアリティを重視する立場からすれば、常に経験的妥当性を見失わなかったマーシャルの方がむしろすぐれているという池本氏のような評価も成り立つであろう。

さて、以上によってシュンペーターとマーシャルの対比が明確にされた。次のシュンペーターの目標は長期理論の建設であった。我々は次節でマルクスとの関連を検討することにしよう。

## VI 長期理論へ向けて

シュンペーターの長期理論が「一世紀といえども短期となる」長期的展望をもつものであることはすでに指摘した。彼が発展理論から長期理論へと移行する過程で意識したのがマルクスであった。ポール・サムエルソン教授によれば、シュンペーターは「労働価値説を冗談と考えていたし、マルクスの剰余価値は、シュンペーターの定常状態においてはゼロとされたし、シュンペーター的發展の結果としての富の増大に伴って、貧しい人もだんだん豊かになっていくとさ

52)53)54) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, SS. 138-139, 邦訳, (上), 245-247ページ。

55) 池本, 前掲書, 129ページ。

56) 次のヘバートとリンクの本はその例であろう。Robert F. Hébert and A. N. Link, *The Entrepreneur: Main Views and Radical Critique*, 1982, 池本正純・宮本光晴訳「企業者論の系譜」1984年。



れ、さらにシュムペーターの考える企業家は競争によって互いに牽制し合うので、景気循環はマルクスの傾向をもたないと考えられていたのである。<sup>57)</sup>それにもかかわらず、彼はマルクスを高く評価した。彼はマルクスの歴史に対する洞察力を尊敬していたし、また資本主義の将来への見通しにおいて彼はマルクスと一致していた。

「経済学者はつねに自分で経済史を研究するか、さもなくば他人の歴史的研究を利用してきたにもかかわらず、経済史の事実を他の学問分野にゆだねた。それがやっと理論に採り入れられるさいにも、それらは単に例証ないしはせいぜい結論の検証という役割をもつにすぎなかった。事実は理論と単に機械的に結びつけられていた。しかるにマルクスの結合は化学的である。すなわち、マルクスは結論を生み出す議論そのもののなかに経済的事実を導入したのである。彼は経済理論がいかんにして歴史的分析に転化されうるか、また歴史的事物がいかんにして理論的歴史 (histoire raisonnée) に転化されうるかを体系的に理解しかつ教えることにおいて、もっともすぐれていた最初の経済学者であった。」<sup>58)</sup>

「たとえマルクスのあげた事実や理論づけが現在いわれているものよりいっそう多くの欠点をもつものであったとしても、マルクスが資本主義発展は資本主義社会の基礎を破壊するということを主張するにとどまるかぎり、なおその結論は真理たるを失わないであろう。私はそう確信する。」<sup>59)</sup>

マルクスは資本主義を社会学的に（すなわち生産手段の私的支配の制度）として定義するが、その資本主義社会のメカニズムを説明するのは彼の経済理論である<sup>60)</sup>。シュムペーターはマルクスの社会学的・歴史学的経済学を「総合の力と偉観」<sup>61)</sup>とまでのべ、最大級の賛辞を捧げている。彼がマルクスについて

57) アーノルド・ヒアチエ編、西部邁・松原隆一郎・八木甫訳、「シュムペーターのヴィジョン」1983年、45ページ。

58) J. A. Schumpeter, *Capitalism*, p. 44, 邦訳, (上), 81-82ページ。

59) *ibid.*, p. 42, 邦訳, (上), 79ページ。

60) *ibid.*, p. 20, 邦訳, (上), 34ページ。

61) *ibid.*, p. 20, 邦訳, (上), 35ページ。

次のような文章を書くとき、彼は自分の長期理論のめざすべき目標を語っていると解することができるであろう。

「すなわち、階級、階級利害、階級活動、階級間の交替のごとき概念に示された社会学的与件が、いかにして経済価値・利潤・賃銀・投資などの媒介をつうじて作用するかということ、および、ついにはそれ自身の制度的骨組みを破壊せしめ、その反面次にきたるべき社会の出現に必要な諸条件をつくり出すような経済過程をまさにいかにして生み出すかということ、これである。」<sup>62)</sup>

シュンペーターの長期理論を我々は絶筆となった「社会主義への前進」(1949年)の中に見ることができる。彼はこの論文の中で資本主義が究極的には崩壊するという持論の根拠を四つあげている<sup>63)</sup>。第一に、実業家階級の成功それ自体が、またこうした成功がすべての階級に対して新しい生活水準を生み出したという事実そのものが、逆説的にその同じ実業家階級の社会的・政治的地位を堀り崩してしまうこと。かれらの経済的機能は廃れたわけではないが、廃物化し官僚化されやすくなる傾きをもつことになるのである。第二に、資本主義的な活動は本質的に合理的なものであるから、合理的な考え方を広め、それにも拘らず生産工場の制度化されたリーダーシップが有効に働くために不可欠な忠誠心や上下の命令服従関係の慣習を破壊する傾きをもつこと。第三に、実業家階級が工場やオフィスの仕事に専念することは、その構造と利害と大規模企業の利害から独立した、しかも結局それに敵対的な態度を発展させたところの、政治上の制度や知識階級を作り上げるのに役立ってしまったこと。第四に、これらすべての結果として、資本主義社会の価値の図式は因果的にはその経済的成功と関連していたにも拘らず、世論のみならず資本家階層自体に対しても支配を失おうとしていること、以上である。

62) *ibid.*, p. 20, 邦訳, (上), 34ページ。

63) J. A. Schumpeter, "The March into Socialism", *American Economic Review*, Vol. 39, 1950, pp. 446-456, 大野忠男訳「今日における社会主義の可能性」昭和48年, 247-268ページ。この論文は1949年のニューヨークでのアメリカ経済学会年次大会でおこなった彼の演説をもとにしている。

これがシュンペーターの資本主義経済についての社会学的・歴史学的視点からする長期理論であった。彼にとって資本主義とは「価値の図式、生活態度、文明」<sup>64)</sup>、すなわち「不平等と家族財産の文明」<sup>65)</sup>であった。彼はこのような資本主義の歴史的過程そのものが社会主義を不可避的に招来することになると指摘したのである。

これまでみてきたように、シュンペーターとマルクスは相違点よりも類似点の方が目立っている。ジョン・エリオットの研究においても、両者が資本主義の将来を、純粋経済学でなく幅広いコンテキストと広範な歴史的視野から見た経済学によって分析したこと、そして両者とも長期的なヴィジョンをもっていたことを指摘し、両者の類似点が強調されている<sup>66)</sup>。

・本論文はマルクスについてこれ以上述べる余裕はない。しかし、以上の諸論によってもシュンペーターがマルクスとの対立点を強調することをせず——マーシャルの場合とは鮮やかなコントラストをなしている——、むしろマルクスを肯定的に評価しようとしたことが十分理解できるであろう。

## VII む す び

シュンペーターはワルラスの一般均衡理論の心酔者として経済学者のキャリアを歩みはじめた。ワルラス的なフレームワークは彼の後の著作でも議論の出発点として利用されている。彼とワルラスの相違点——静態的フレームワークにおいての話だが——は、ワルラスに利子が存在するのに対して、シュンペーターにはそれが存在しないということの一点である<sup>67)</sup>。この唯一の点を除いて、彼はワルラスをほとんど肯定的に受け入れた。しかし、ワルラス的な静学の世界に満足できなかった彼は次に発展理論の建設へと向かう。そこに大きく立ちふさがった存在こそアルフレッド・マーシャルであった。彼はマーシャルを乗

64)65) *ibid.*, 邦訳, 256ページ。

66) John E. Elliot, "Marx and Schumpeter on Capitalism's Creative Destruction", *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 95, No. 1, Aug. 1980, p. 66.

67) J. A. Schumpeter, *Entwicklung*, S. 59, 邦訳, (上), 115ページ。

り越えようとした。そして彼はマーシャルとの対立点を際立たせることによって自らの独自性を獲得しようとしたのであった。シュンペーターは、ワルラスとマーシャルを乗り越えたと信じた。そして次に彼は長期理論にとりかかることになった。そこでは主にマルクスを念頭においていたと思われるが、今度は彼はマルクスとの対立点よりも類似点の方を強調するのである。かくてシュンペーター体系は完結する。

私が考えるところ、シュンペーター体系は(1)静学理論、(2)発展理論、(3)長期理論、という三段階の構造をもった理論体系である。私はゆえにこれを「三段階理論」と名づけたいと考える。

さらに私がもっとも重視するのは、シュンペーターが(1)から(2)へと移行する過程である。三つの中でシュンペーターの独創性が光っているのは、(2)においてであり、(1)から(2)へと飛躍するためにはマーシャルと対決しなければならなかったからである。本論文が狙いとしたところも、この点を明確にしたいという認識であった。

伝統派理論に対する反逆はつねに鋭い批判によって行なわれる。シュンペーターも、ケインズがビグーに対して非難をあげたごとく、マーシャルを標的に選び、これをめがけて矢を放つことで独自性を獲得したのである。

## 付 記

本論文は1985年6月、菱山泉教授とシュンペーターについて議論したことに端を発する。同月中に書き上げた論文を縮小・修正したものが本論文である。有益なコメントを与えられた菱山教授、及びゼミにおいてシュンペーターを取り上げて下さった故馬場正雄教授にお礼を申し上げる次第である。